

## 広島女学院大学 二〇二六年度 指定校制推薦入試 (第一回)「小論文」

次の文章は、「生活史研究家 小泉和子さんの記憶と願い (下)」 戦後 80 年 便利すぎる世 家事を自分の手に戻す」と題して、新聞に掲載されたインタビュー記事の一部です。文章を読んで、問いに答えなさい。

戦争が終わっても、その後は食料がさらに乏しくなり、ものすごく厳しい生活でした。でも「戦争に取られないだけありがたいよ」。母やおばたちは事あるごとに繰り返しの口にしていました。

父は病弱で徴兵されませんでした。いとこがフィリピンで戦死するなど、周りで多くの人が戦場に送られました。兵隊に行けば死ぬことになる。名誉の戦死なんてウソだと分かっている。でも口には出せず、戦々恐々としていた。その恐怖から解放されたことが何よりも大きかった。

新しい憲法や家父長制を廃止した民法などが施行され、今の日本の基本となっています。それがどれだけ貴重なものだったか。この基礎の上に生まれて育った今の人たちには、当たり前すぎて伝わっていないのではないかと危ぶんでいます。

### ― 中略 ―

戦前の昭和は史上最も家事が大変な時代でした。和洋二重生活になり、家事が複雑化しました。和服と洋服の 2 本立て。家庭で簡単な洋食を出し、和風住宅にも洋間がつき、家事量が増えたのです。

また、来客の接待や宴会、病気の看護など、あらゆることを家庭内で行い、それも高いレベルが求められました。

そして家事のすべてが女性に背負わされていたのです。延々と続く重い家事からの解放は、女性たちの願いでした。

戦後、洋装が主になり、家も居間が間取りの中心になるなど生活の簡素化が進みました。家電が普及し、家事の負担は少しずつ軽くなりました。

振り返ると、戦後直後の混乱を抜け、落ち着いてご飯も食べられるようになった昭和 30 年代から 40 年代半ばは、日本人が最も幸福を感じた時代ではないかと思えます。

### 破滅避けるため

その後も省力化はどんどん進みました。家電製品は多機能化し、衣服も食料品も工場が製造し、家事を代行する商品を次々と企業が開発しました。それは女性たちの願いに応えるもので、歓迎され、家事が家庭の外に出ていった。

規制緩和で巨大スーパーが現れ、街のあちこちでコンビニが 24 時間営業しています。確かに便利になりました。

でも、流通が広域になり、パッケージにも輸送にも費用と資源を費やしている。大量生産と大量消費と大量廃棄が当たり前に。そして、人間の体内からはマイクロプラスチックが検出されるようになってしまった。地球規模で環境破壊が進み、途上国での人権侵害も大きな問題です。

これは、便利で快適なことが生活の豊かさだという勘違いが招いた結果です。これ以上の破局を防ぐため、政治や社会規模での対応も必要ですが、<sup>①</sup>くらしからできることもあります。

家事は人が生きていく上で不可欠です。便利さだけを追求し、むやみに省力化すれば大事なことを見失う。もちろん、女性だけでなく、男も女も子どもでも、誰もがかわらなければいけないことなのです。家事が知恵を育み、人を鍛える力があることも忘れてはならないでしょう。

家事の何をどこまで自分であるかという線引きはありません。それぞれ自分で考えて選択する必要があります。肝要なのは、企業任せにするのではなく、家事を自分の手に取り戻すことです。そのためには労働時間の短縮も必要です。

もう一つは、商店街の復活です。プラスチックの容器も使わず、生鮮食品なら近郊の産品を扱うこともできる。買い物

の際の会話もあって、人のつながりが生まれ、コミュニティーが育つ。

今より不便かもしれませんが。でも、何でも便利じゃなくて、少し不便でもやらなくちゃいけないことを、みんなが考えなきゃいけない。破滅するよりはいいじゃない。

(聞き手・大村美香)

(出典 朝日新聞 大阪本社版 日刊 二〇二五年九月一三日)

問一 傍線部①について、「勘違いが招いた結果」とはどのようなことでしょうか。八〇字以内で説明しなさい。(句読点も文字数に含めます。)

問二 傍線部②について、破滅を避けるために、「くらしからできること」とはどのようなことでしょうか。戦後八〇年の生活史を踏まえ、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。(句読点も文字数に含めます。)